

## サン・ルイ断章：在外研究活動の記録

著者	端 信行
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	1
号	4
ページ	887-892
発行年	1977-01-14
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00004631">http://doi.org/10.15021/00004631</a>

## サン・ルイ断章

——在外研究活動の記録——

端 信 行\*

### はじめに

わたしは、1976年2月24日から3月25日まで、わずかな期間ではあったが、文部省派遣の短期在外研究員として、西アフリカのセネガル国に出張する機会を与えられた。その研究課題は「アフリカ農民の社会変化について」というものであった。かねてから、熱帯アフリカにおける農業の諸形態や農民社会の編成原理に関心を抱いてきたわたしとしては、熱帯アフリカ諸地域の中でも、最も早くから商業的農業の普及やそれにとまなう経済・社会的変化を経験してきたと考えられるセネガルにおける農業形態や村落社会は、アフリカ農民の社会変化を考えるうえで興味深い対象であった。今回の出張において、そうしたセネガル農民社会の一面を観察しえたことは、望外の幸せであった。

上記の出張期間中に、わたしはセネガル国の主要な研究機関を訪問し、文献の渉獵、一部の現地研究者との意見交換を行ない、不十分ながらもいくらかの成果を

うることができた。この研究成果については、いずれ何らかの形で報告するつもりであるが、ここではセネガル国滞在中でもとりわけ印象の深かった、旧都サン・ルイの訪問を中心に、セネガル国での在外研究活動の一端を記録にとどめておくことにしたい。

### サン・ルイへ向う

その朝、首都ダカールの波止場にほど近い中央駅にやってきた時は、まだ夜明けに少し間がある時刻だった。午前6時30分を少し回ったころだったろうか。中央駅の高い円天井から、裸電球の光がにぶく駅構内を照らしていた。わたしと同じ朝汽車に乗るのだろうか、老婆がひとり手さげや布製の大きな袋を積み上げて、固い木のベンチにうずくまっていた。

セネガルの標準時は、グリニッチ標準時より1時間おそいので、ダカールの夜明けはかなり遅くなっている。こちらもベンチに腰をおろして、駅全体が動きだすのを待つことにする。とにかくアフリカでは、待つことにケチケチしてはならない。

午前7時、ようやく空の一角が白みはじめ、朝汽車をめざす人びとが、三々五々集まりはじめ、切符売り場にも係のものがやってきた。ダカールからの鉄道は、植民地時代にある程度発達しており、西アフリカの旅行者によく知られている隣国マリの首都バマコへは週1便、国内各地へはほぼ毎日1便がでている。北部の中心サン・ルイへは、直行便が1日1往復しており、ほかに他の支線と連絡しながら1便がサン・ルイへ向っている。他の支線と連絡する便は、オムニバスと呼

\* 国立民族学博物館第3研究部

ばれており、これだと何時にサン・ルイに着くかわからないということだったので、わたしは早朝の直行便(ディレクト)をめざしたのであった。

わたしの乗ったサン・ルイ行の直行便は、定刻の7時25分、ダカール中央駅をあとにした。この時、ようやく夜が明けたようだった。白っぽい明るさが増し、街をおおっていた闇は、きれいに洗い流されてしまった。日の出は、その直後だった。それは、アフリカの見知らぬ土地への旅立ちの時にいつも感じる、軽い興奮を誘う一瞬であった。

わたしは、今回のセネガルでの在外研究が決まった時から、サン・ルイの町を訪れることを計画していた。サン・ルイは、今日でこそ、人口約5万の地方都市になってしまっているが、長く西アフリカにおけるフランスの植民地経営の拠点であった。またこの町は、フランスがアフリカで築いた最も古い町であり、その起源は古く1659年にさかのぼる。

その年、フランスの貿易会社であるベルデ岬・セネガル会社が、セネガル河口の左岸寄りのソル(Sor)島に、砦を築いたのであった。この会社は、セネガル川上流地方からの奴隷を取り引きしており、のちにゴムや金も扱っていたようである。1789年には、サン・ルイは人口7,000の町になっていたという。その同じ年、セネガル河口より南方に位置するもうひとつの拠点、ベルデ岬沖のゴレー(Gorée)島の人口は2,500であった。このゴレー島も奴隷貿易の中継地として有名で、往時の奴隷を収容した家屋がそのまま今日まで保存されており、一般にも公開しているのであった。

このふたつの拠点は、1830年代までは、貿易基地として徐々に人口も増加し、街も拡大したようである。サン・ルイの教会が1827年に建てられたのをはじめ、大きな建築物のいくつかはこの頃に建てられており、また1832年におけるゴレー島の人口は5,000を数えるにいたっている。

1830年代をすぎるところから、西アフリカのギニア海岸に沿った上ギニア地方は、大きな変化を経験することになる。それは、ラッカセイの商業的栽培によってひきおこされてくるのである。それは、1830年代のはじめにガンビア川沿いの地方ではじまり、1830年代の後半にはギニア南部と北部シエラレオネに拡大し、そして1840年代の前半にはセネガルとその南の地方に広まった。その広まり方は急速で、それは多くの社会で大きな影響をもつ社会的・経済的変化を招くことになったのであった。

この上ギニア海岸地方におけるラッカセイの商業的栽培は、フランスやセネガルの貿易商とイギリスやシエラレオネの商人たちとの間の競争をひきおこすことになったが、当時のフランスがラッカセイを大量に求め、その価格安定に努めた結果、フランスは、1860年代までに上ギニア海岸地方における商業上の優位を獲得し、ひいては19世紀末の植民地分割においてその政治的支配権の確立に有利な立場を築くことになったのである。

この時期において、フランスはゴレー島をはなれ、本土側のベルデ岬にダカール(港)を築いたのである。それは1857年のことであった。これ以後、セネガルにおける経済活動の中心は、ダカールに集中しはじめたのである。それはとりもなおさずラッカセイ生産地域との結びつ

きを背景としたものであった。

しかしながら長年にわたるサン・ルイの政治的機能は、20世紀にはいるまでは維持され、1885年にはダカールとサン・ルイのあいだ、約270 km にわたって鉄道が敷かれた。また植民地体制が確立され、フランス領西アフリカが成立したあと、1895年から1902年までは、その首府がサン・ルイにおかれていた。しかしこのフランス領西アフリカの首府も、1902年にはダカールへ移されたのである。もっとも、今日のモーリタニアを含む旧セガネル領の首府は、独立直前の1958年までサン・ルイに置かれていた。

この長い歴史をもつサン・ルイを訪れることは、日本ではとても望めない資料の渉猟もさることながら、アフリカの歩んできたひとつの道をふりかえることにもなると思われるのである。

## IFAN のこと

ダカールを夜明けとともに出発した列車は、ダカール郊外の2、3の駅に停車したのち、ベルデ岬のつけ根に向かって走る。窓外には、早やバオバブ樹が点在しはじめる。海岸に近いためか巨木は少ない。ぼんやり単調な風景をながめているうちに、列車はティエスの町にはいった。この町は、セネガルでは3番目に大きな都市で、ラッカセイの集散地で知られている。セネガルにおけるラッカセイの一大生産地は、このティエスから内陸にはいったセレール (Sérère) 地方で、その中心地がセネガル第2の都市カオラックである。したがって、ティエスはカオラックへ向う鉄道の分岐点にもあたっている。

列車が止まると、ワット物売りが寄ってくる。手にしているのは、ほとんどラ

ッカセイを使ったビスケットともパンともつかないものであった。朝食がわりに、ひと包を求める。駅弁とまでいなくても、名産にはまちがいない。アフリカといえども、町によってそれぞれの名産があり、よく知られたものは、こうして鉄道駅の物売りや街道で売っているものだ。ティエスでは、オレンジのような果物の物売りには出会わなかった。

街の通りをみると、馬車がずい分走っているのが目についた。小さな荷台には、ラッカセイのものらしい南京袋が積み上げられていた。また人を乗せる馬車も走っている。馬はかなり小型で、大きさだけからは、ロバぐらいにしか見えなかった。この馬車の利用は、内陸各地ではかなり一般的なようで、その後も大きな町では必ず見たし、サン・ルイの街中でもかなりみられた。もっともサン・ルイでは、ほとんどが人を乗せる馬車で、タクシーとの競合は愉快的なコントラストをなしていた。

サン・ルイ行直行便は、バオバブの点在する荒涼としたサバンナを進んでいたが、サン・ルイの手前の大きな町ルーバをすぎた直後に急停車した。周囲はバオバブとわずかな灌木とが生えた丘陵で、一体何かと思えば、どこかで人が落ちたとのこと。列車はかなりバックした。中年の男が落ちて、頭にケガをしているらしい。ケガ人は、次の小さな町でおろして、医者の手当を受けさせていた。列車がサン・ルイの町へはいったのは、2時少し前であった。

サン・ルイの駅は、ソル島のセネガル河岸にあり、目の前にサン・ルイ (Saint Louis) 島へ渡る大橋がかかっていた。この橋を渡ると、サン・ルイの中央郵便

局があり、その向いに小さなホテルがあった。そこがサン・ルイでのわたしの寝ぐらとなった。

わたしは、セネガルでの在外研究にあたって、現在はダカール大学の付属となっている IFAN (Institut Fondamental d'Afrique Noire 黒アフリカ基礎研究所) を主な研究機関として申請していた。セネガルに入国した直後、この IFAN の所長 A. サンプ (Amar Samb) 博士を訪問し、あらかじめサン・ルイでの研究者も紹介してもらっていた。そこで、サン・ルイでの行動はまずその人を訪ねることからはじめたのだが、残念ながら当人は隣国マリへ出張しているとかで会えなかった。

そこで次席の人から少しばかり話を聞いたのだが、1947年からはじめられているセネガル川河口のデルタ開発事業は、なかなか興味深いものであった。

この開発計画では、セネガル南部のカザマンス (Casamance) 地方で行なわれている湿地を利用した水稻栽培を、このセネガル河口デルタで行なおうとするもので、栽培技術はカザマンス地方で行なわれている伝統的な方法をそのまま利用する計画とのことであった。現場を見たと思ったが、ここサン・ルイから車で1日かかるとのことで、それは断念せざるを得なかった。

しかしこのセネガル河口デルタは、カザマンスとちがって、きわめて乾燥がはげしく、植生もなく、また土壌も粘土性であるなど困難な条件もあり、またこの地方の伝統的住民が遊牧民であるため、この開発事業の成功にはまだまだ難問があるように思われた。

目的の人に会えず、何か良い方法はな

いものかとその次席にわたしの研究目的を話すと、それなら IFAN に行ったらよいという。わたしはサン・ルイに IFAN があるとは知らなかったが、どこかと聞くと、サン・ルイ島の南端にあるという。早速たずねてみた。

それは、正式には IFAN ではなかった。それは CRDS (Centre de Recherches et de Documentation du Sénégal セネガル研究・文献センター) という、ひとつの国立の研究機関であった。ただし、その建物を正面から見ると、そこには薄く IFAN の文字が浮んでみえるのであった。それを見てはじめて気がついた。この建物が、前の IFAN の建物なのだと。

前の IFAN というとな変だけれども、現在のダカール大学の付属研究所である IFAN は、創設が1938年と言われている。そしてその名称も、F は Français の頭文字であった。それが数年前に、Fondamental に変更されたのである。ここで前の IFAN と言っているのは、黒アフリカ・フランス研究所のことである。わたしは不覚にも、IFAN がサン・ルイで創設されたとは知らなかった。あとで友人になったこの CRDS の司書 A. ディオップ (Alioune Diop) 君の話では、このサン・ルイ IFAN が改称されたのは、1954年のことだという。したがってその時に、IFAN はまだ Français のままでダカールに移され、それがのちに Fondamental に変えられたわけである。

しかしながら、すでに20年も前に改称されているにもかかわらず、サン・ルイの人がこの CRDS を IFAN と呼んでいるのは、一体どういうことになるのだろうか。おそらく通称としての IFAN は、町の人には今でも十分に認められている

のだろう。タクシーさえも、JFANでちゃんと目的地へ行ったのだから。このことは、とうとう数日の滞在では分からずじまいであった。

このCRDSでは、所長のM.ディア(Mouhamad Dia)博士に面会し、研究員や司書の人に紹介され、以後、サン・ルイ滞在中のかなりの時間を、このCRDSですごしたのであった。

### サン・ルイの漁民

サン・ルイの町の中心は、やはりサン・ルイ島である。ソル島を含めた大陸側の方には、住宅地がのびて、居住人口は増えているが、行政官庁、議会、学校、研究機関、商店などが集中しているのは、サン・ルイ島である。今日は、行政官庁となっている建物は、かつての総督府で、正面からみると、テラスと両翼に特色づけられた建物は、いかにも植民地風である。この総督府の建物が、大西洋に向けて、西を正面にしているのは、一体どんな意味をもつのだろうか。こういう建物をながめていると、ふとそんな想いにとられれたりする。

この総督府の建物のあるサン・ルイ島は、セネガル川の河口に形成された、細長い砂州のひとつで、サン・ルイ島そのものは、南北2.2 km、東西0.3 kmの小さな中之島である。ちょうどパリのサン・ルイ島のように。このサン・ルイ島の外側に、もう一条の砂州が形成されており、その砂浜は直接大西洋の波を受けとめている。波はかなり高い。

この沖合で、西アフリカ最大の沖合漁業が行なわれていた。元来アフリカでは、海での漁業はきわめて例外的である。しかし、ここセネガルでは、二つの地方で、

かなり大規模な沖合漁業が行なわれている。ひとつは首都ダカールにほぼ近いベルデ岬のつけ根の地方で、レブ(Lebou)族が海浜に居住し、独特の沖合漁業を行なっている。いまひとつの中心がサン・ルイで、とくにサン・ルイ島南半地区をゲット・ンダール(Guet N'Dar)と呼ぶが、この地区はレブ族ならびにウォロフ(Wolof)族が、前者と同様の様式をもった沖合漁業を行なっている。ゲット・ンダールでは、毎年2,000トンの水揚げがあり、アフリカ人の手による伝統的な沖合漁業としては、西アフリカ最大である。夕方には、浜に魚が揚げられ、その場で買われる。その量をみていると、サン・ルイの住民は、毎日、魚を食べているのではないかと思われるくらいだ。しかしこれも事実のようで、CRDSの司書ディオップ君は、サン・ルイでウマイものは魚だ、ニワトリなどは食べる気にもならないというような話を話してくれた。アフリカ人の食事は、一般に単調なので、どうしても嗜好が片寄る傾向がある。わたしがいままでにアフリカ各地で経験してきた例からみても、その地方地方で、その食べるものはきわめて固定的であった。サン・ルイもその例にもれないようである。

わたしは、サン・ルイには数日しか滞在しなかったが、夕方には必ず浜へ出ていた。網を引きあげながら海浜に舟を寄せる男たち、その獲物を待ち、良いものを求めようとする女たち、大西洋に沈みゆく大きな赤い太陽、そして海から吹きよせる強い風、それらが織りなす光景は、予想だにできなかったサン・ルイの一面であった。

サン・ルイのかつての波止場に面した

倉庫は、全くの廃屋となっていた。ルノーやミシュランの看板も崩れ落ちたままに放置されていた。それは、まさしくツワモノどもの夢のあとであった。フランスの去ったあとは、巨大な廃墟にも等し

い人工物が散在していた。

わたしのサン・ルイは、うつろいやすい人間の営みと、そして変わらぬ人間の営みの、ふたつの姿をまざまざと写し出していた。